



東浪見寺本堂
【町指定有形文化財】享保8年（1723）頃の建築。



芥川荘
【国登録有形文化財】明治30年（1897）代の建築。



旧斎藤家住宅店蔵
【国登録有形文化財】明治中期の建築。現在は店舗として営業中。



観明寺四脚門
【町指定有形文化財】町内最古の建物と言われ、江戸時代の17世紀末頃の建築と見られています。



旧秋場家住宅主屋
【国登録有形文化財】明治33年（1900）の建築。



高原家住宅店蔵
【国登録有形文化財】明治後期の建築。現在は店舗として営業中。



玉前神社本殿【県指定有形文化財】貞享4年（1687）の建築。



東浪見海岸の地曳網の様子を描いた版画（江戸時代）



地曳網漁の様子（昭和時代）

今も息づく、古の風景

一宮には多くの古い建物、歴史的建造物があります。玉前神社の門前町の町並み、海岸の避暑地、農家、漁家など、様々な文化圏が混ざりあい、多種多様な建造物が建ち並んでいます。それらは古くより一宮で人々が暮らしてきた証拠であり、彼らが築いてきた文化です。私たちはこれを守り、後世へ受け継いでいかなければなりません。

江戸時代の一宮町は、一宮本郷村、東浪見村、一宮川南岸の新発村、川向こうの宮原、船頭給、新地、南西部の網田村などに分かれていました。

近世には、一宮町にとっては、ふたつの大きなトピックが指摘できます。ひとつは、九十九里浜全体にわたっての、地曳網イワシ漁です。1500年代に和歌山県から伝わったという地曳網によるイワシ漁は、一宮を含む九十九里の地で隆盛を極め、重要な産業となりました。イワシは、「ほしか」といって、干して田畑の肥料としたのです。「ほしか」は、江戸・関西・奥羽などに出荷されたといわれますが、関西の綿花栽培での需要が特に大きかったとされます。一宮からは直接海路や利根川水路を使う大量輸送方法がありました。同時に陸路で茂原から潤井戸（市原市）を経て江戸湾に面する浜野（千葉市）・寒川（千葉市）まで運び、そこから海路を使う道もあつたとされます。いづれにせよ、水運での長距離大量輸送が行われ、広い範囲の消費地を有したことは注目すべきことです。

網元は大きな力を持ち、岡集落に家を構えました。浜には納屋がおかれ、網元が監督し、作業員が起居するほか、加工用施設をもつものもありました。江戸後半期には、外部からの出稼ぎの者を含めて、納屋集落が東浪見・一宮本郷・船頭給・新地にも見られるようになりました。

地曳網イワシ漁は何度か盛衰がありました。天保年間が最盛期で、三日間で東浪見原網が二千六百両、一宮本郷村倉田網が二千四百両と伝えられるように、大変な活況を呈したそうです。

明治20年代以降になると、揚網という新たな技術の発明と普及によって、地曳網漁は急速に衰退しました。現在は一宮町には地曳網保存会が夏の間操業し、その余韻を今に伝えています。

ところで、こうした浜を中心とする産業の興隆は、商業やサービス業の発展を促し、一宮市街地の発達を促進することにもなりました。イワシの商いはもちろん、漁業従事者を対象とするサービス業として、居酒屋世・質屋渡世・湯屋渡世・髪結渡世などが活況を呈し、市街地は発展していきました。もともと一宮の市街地は、17世紀から江戸街道の宿場として形成され、本納・長南・大網・茂原・一宮の五ヶ村を一組とする「五ヶ村」が開かれて、東上総地域の物資集散の拠点として機能していましたが、そうした側面が更に増進されることとなりました。

また、こうした社会の活気は文化活動をも促進しました。平田篤胤・大原幽学・佐藤信淵らをはじめ、多くの知識人が一宮を訪れたことが記録されており、一宮の住民が彼らとともに文化活動に従事していたことがわかります。